

も思ひよらるれど、つましあればにや、さればさらんと、すこしおかしくなりぬ、

〔十六夜日記〕二村山をこえてゆくは、山も野もいと遠くて、日もくればはてぬ、

はるくくと二村山を行過てなほこゑたどる野への夕やみ、やつはしにとゞまらんといふ、く
らさに橋もみえずなりぬ、

さ、がにのくもで危き八橋を夕ぐれかけて渡りぬるかなる○又見玉葉和歌集の
かな作かれぬる

〔井蛙抄〕順徳院御百首

駒とめてまばしはゆかじ八橋のくもでにまろきけさの淡雪

京極黄門云、八橋のくもで説々おほく候へども、古歌にも詠じ來候、

〔海道記〕八日○貞應二年
四月、中略三河國にいたりぬ、雉鯉鮒が馬場を過て、數里の野原に、一兩のはしを名

づけて八橋といふ、砂に睡る鴛鴦は夏を辭去り、水にたてる杜若は時をむかへて開たり、花はむ
かしの色かはらず咲ぬらむ、橋もおなじ橋なれども、幾度つくりかへつらん、相如が世をうらみ
しは、肥馬に乗て昇僊にかへり、幽子身を捨る窮鳥に類て當橋を渡る、八橋よ、八橋よ、くもでに物
おもふ人は昔も過ぎや、橋柱よ、はしばしらよ、をのれも朽ぬるが、むなしく朽ぬるものは今もま
たすぐ、

〔東關紀行〕ゆきくして三河國八橋のわたりをみれば、在原業平かきつばたの歌よみたりけるに、
みな人かれいゐのうへに、なみだおとしける所よとおもひ出られて、そのあたりをみれども、か
の草とおぼしき物はなくて、いねのみぞおほくみゆる、

花ゆへにおちし涕のかたみとや稻葉の露を殘しおくらん、源義種が此國のかみにてくだり
ける時、とまりける女のもとにつかはしける歌に、

もろともにゆかぬ三河の八はしを戀しとのみや思ひわたらん、とよめりけるこそおもひ出